

(報告書)

近世・近代における佐賀のたばこ産業発展についての考察

助成研究者 近藤貴子(武雄市図書館・歴史資料館 長崎方控研究会研究員)

共同研究者 川副義敦(武雄市図書館・歴史資料館 参事(学芸員))

1. 研究目的

江戸時代後期から近代(煙草専売法実施以前まで)における、佐賀藩および佐賀県内のたばこ事情全般に着目し、同地域における煙草産業の様相について研究する。

従来、明治37年に実施された煙草専売法以前の佐賀および佐賀県の煙草産業の実態を明らかにする先行研究が無く、資料の存在についても不明な点があった。筆者「佐賀市のたばこ商 森永作平」『たばこ史研究 No.122』(公益財団法人たばこ総合研究センター、2012年)では、森永作平の関係資料を紹介したが、執筆の段階でそれ以外にも佐賀および他地域の煙草に関する資料の存在が確認された。そこで本研究では、時代を前述の通りに定め、各地に所蔵される資料から佐賀の煙草業者等を中心に研究を進めることとした。

2. 研究方法

研究の方法として、主に佐賀県内の博物館や歴史資料館、図書館などに残される煙草関係資料を調査した。特に、江戸時代後期については、これまで煙草の分野では未調査であった「長崎方控」(武雄鍋島家資料/武雄市蔵)、佐賀城下における煙草関係者が多数記録された「^{かまどちょう}竈帳」(公益財団法人鍋島報効会蔵)を中心に、当時の煙草事情を追った。また、煙草専売法実施以前までの明治時代については、明治24年(1891)6月から発行された中央煙草業協会の機関誌『^{えんそう}煙草雑誌』を中心とし、佐賀県の統計資料、当時佐賀の代表的煙草商だった森永作平関係資料等を比較しながら、民営期の煙草関係者および取扱い煙草を抽出した。

3. 研究計画と実施状況

本研究については、前掲「佐賀市のたばこ商 森永作平」執筆の際明らかになった資料を含め、佐賀県内の博物館や歴史資料館、図書館での煙草関係資料の調査、東京での資料調査および現地確認、長崎県での資料調査を計画した。

佐賀県内では主に3件の資料に着目した。武雄市図書館・歴史資料館に所蔵される「長崎方控」、公益財団法人鍋島報効会蔵の「竈帳」、佐賀県立博物館に寄託されている、明治民営期の佐賀で活躍した森永作平関係資料の調査を実施した。

東京では、たばこと塩の博物館において『煙草雑誌』を調査した。これは中央煙草業協会発行の機関誌で、現在同館で把握されている（たばこと塩の博物館のほか、天理大学附属参考館、北海道大学、島根大学、個人所蔵）117冊（附録を含む）の内、佐賀の煙草に関する記事および広告を抽出、同誌の附録号より佐賀の煙草関係者も確認した。また、佐賀出身で銀座で活躍した人物がいたことから、中央区立図書館および銀座において当時の煙草関係者、各店舗の位置関係、佐賀との関係を研究した。

また長崎県では、江戸時代、佐賀藩が福岡藩と隔年交代で長崎警備を実施していた事や、現在の長崎県内に佐賀藩領があった事、また、明治時代初期に佐賀県は数年間長崎県へ編入されていた事など、長崎との関わりも深かったため、長崎県立図書館、長崎歴史文化博物館、島原市図書館で所蔵資料の調査を実施した。

4. 研究成果

4-1. 佐賀藩政時代の煙草事情

佐賀藩政期、葉煙草の生産および煙草の製造関係について記録する資料は乏しいが、藩内の二つの地域で葉煙草の生産が見られる。

一つは現在の伊万里市東山代^{ひがしやましろ}地域で、文化・文政（1804～1830）頃には葉煙草が栽培されていた。伊万里地方のうち、山城地域は藩政期、佐賀藩の三支藩の一つ小城藩の領地であった。

記録によると、同地域の煙草の沿革は次のとおりである¹。

小城藩主、藩内巡視ニ際シ葉煙草ヲ献セシヨリ

特別保護監督ノ下ニ耕作セシメラレ

年々藩主の御料ニ資シ来ルカ故ニ、

其ノ耕作ニ調理ニ稍々見ルヘキモノアリ

其ノ種類ノ如キモ幾分カ国分種ニ類スル肩怒リト剣先葉アリ

ケタシ藩主ノ種子ヲ薩隅地方ニ求メ、耕作セシメシモノナランカ（読点筆者）

これによると、栽培されていた葉煙草は国分葉の種類に似ていることから、小城藩主が種子を薩隅地方（現在の鹿児島県）に求めた可能性があるのではとされる。なお、この地域の煙草は「川内野煙草」と呼ばれた。

また、もう一つの地域は現在の多^{たく}久市および杵島郡江北町^{きしま こうほく}あたりで、山間部の畑作として煙草が名産とされた。弘化4年（1847）に書きあげられた多^{たく}久の地誌的記録「丹^{たく}邱^{ゆうし}邑誌」によると、「土産」の項目の中に「煙草 花祭村・板屋村・女山村ニ出、花祭村ヲ上品トス」とある。このうち、花祭村^{はなまつり}は現在の多^{たく}久市南多^{たく}久町花祭と杵島郡江北町大字山口字花祭にあたる地域で、江戸時代後期に葉煙草の栽培が行われていたこ

¹ 北九州たばこ耕作連合協議会編『煙草史 福岡・佐賀・長崎』煙草史 福岡・佐賀・長崎 刊行会、昭和51年(1976)、11頁より引用。

とがわかる。また、藩に年貢として葉煙草が納められていたこと、特に品質の良い花祭村のものは藩主の用に供していたとされる²。また、佐賀藩内の名物が記録されている資料「肥前名物題註」には、「七十七 剉煙草 多久花祭村の葉を以て最となす。而して治下剉み手甚工みなり」³（※剉は、きざむの意味）と書かれている。資料は嘉永から安政年間(1848～1860)頃のものと考えられており、「丹邱邑誌」と同時代のもので、江戸時代後期の佐賀藩内の煙草は、花祭村産葉煙草のものが最上だったとされる。

【参考】藩政時代の北部九州における煙草産地分布図



出典：北九州たばこ耕作連合協議会編『煙草史 福岡・佐賀・長崎』煙草史 福岡・佐賀・長崎 刊行会、昭和 51 年、12 頁、図 1 より。

4-1-1. 武雄鍋島家資料「長崎方控」に見られる煙草について

佐賀藩の基本的な支配体系は、本藩、三家（三支藩）、親類、親類同格、家老、着座の構成である。このうち親類同格に列せられた武雄鍋島家は、江戸時代初めには知行高 21,600 石を有し、「大配分」（自領内での大幅な自治権）を受け、本藩の請役（家老）を務める家柄であった。武雄領（武雄邑）があった現在の武雄市には、多くの蘭学関係資料が残る。蘭学と武雄を結び付ける大きな要因が、当時、日本で唯一西洋に開かれた長崎の警備を、前述の如く佐賀藩と福岡藩が隔年で行っていたことにある。武雄領からも警備兵が派遣され、蘭学をはじめ様々な情報や物品が得られる長崎とのつながりが生まれた。

² 北九州たばこ耕作連合協議会編『煙草史 福岡・佐賀・長崎』煙草史 福岡・佐賀・長崎 刊行会、昭和 51 年(1976)、10 頁～11 頁。

³ 千住生「肥前名物題註」『肥前史談 七月号』肥前史談會、第 13 卷第 6 号、昭和 14 年(1939)、13 頁より。

<第3冊「長崎方」>

(嘉永二年) 六月十八日長崎ヨリ白帆船見隠候注進

飛脚帰便

- 一 ハ印 五拾巻、ち印・ハ印二分・八分調合煙草五拾巻
刻方申付候様

外国船見張番からの注進で武雄に来た飛脚が長崎に帰る際、「ハ印」の煙草を 50 巻、「ち印」と「ハ印」を 2 分と 8 分で調合した煙草を 50 巻注文している。これに対し、翌月の到来品の中に、次の通り物品を確認することができる。

<第3冊「長崎方」>

(嘉永二年) 七月廿三日藤吉持越

...中略...

- 一 刻煙草 ハ印五拾巻 **上**
ハ印・ち印合 五拾巻 **少氣強シ** (ゴシック斜体朱書)

「長崎方控」にはここに見られる銘柄「ハ印」「ち印」など「イ・ロ・ハ印」のほか、「鶴・亀印」「松・竹・梅印」などが見られる。注文では銘柄を指定し、時には調合具合も指示を出しているが、これら長崎から武雄にもたらされた煙草の産地については今回の研究では明らかにすることができなかつた。長崎という土地柄、オランダおよび中国からの輸入品とも考えられるが、輸入品目ではなく長崎からの輸出品目の中に刻煙草および葉煙草が見られる⁴ことから、武雄に取り寄せられたものも国産品の可能性が高いと考えられる。

煙草を注文する際、それぞれの煙草の強さや香りにも指示を出している箇所が多く見られる。注文品に細かな指示を出す仕方は煙草に限らず「長崎方控」全体的なもので、資料の特徴の一つでもある。

煙草を単なる商品としてではなく、注文者の好みも反映させたと推測させる記述の一例を挙げよう。

<第4冊「長崎方」>

(嘉永六年九月もしくは十月) 阿蘭陀注文、小川

...中略...

- 一 御多葉^(ママ) 紛 此節之手頭二巻御試相成候所、呑気者
別而和ラカニ有之候へとも矢張跡ニカラミ残り不宜、

⁴ 山脇悌二郎著『海外交渉史』法政大学通信教育部、『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、昭和 39 年より。オランダ船および唐船の輸出品目に記載あり。

夫よりハ其前ニ参り候手頭之方却而宜敷有之
候故五十卷刻差越候様、尤呑氣間違者不相叶
ニ付手頭之内一卷差越候事

(読点筆者)

「御多葉粉の手頭⁵二巻をお試しになったところ、呑氣⁶はやわらかだが後に辛みが残
り、以前に届いていた手頭の方が良かったとのことなので、その分で五十巻刻取り寄
せるようにすること。ただし呑氣については間違いがあつてはならないので、手頭の
うち一卷を（見本として）持っていくように」との内容が書かれている。

また、次の様な記録も見られる。

<第4冊「長崎方」>

(嘉永六年) 十二月廿八日 藤吉

...中略...

- 一 煙草手頭呑氣ハ可也ニ宜敷候へとも匂ヒ下品ニ
有之候間、今一応一二品急々手頭遣様

(読点筆者)

「煙草手頭の呑氣は良いが匂いが下品であるため、今一応一・二品の手頭を急いで取
り寄せること」とある。さらに、第5冊目の安政2年7月には「呑氣弱ク有之候故六
拾巻差返」と記録され、「呑氣」に対してのこだわりも見られる。

「長崎方控」を記録した人物は明らかにはなっていないが、筆致がおおよそ一致し
て見られる点や呼称や敬語の使い方から、鍋島茂義自身、もしくは彼の側近の可能性
が高いと考えている。煙草の強さ、味、匂いなどの嗜好は鍋島茂義自身の好みで、こ
だわりの煙草が長崎から武雄へもたらされていたと考えられる。また、鍋島茂義は、
文政5年(1822)に佐賀藩請役(家老)に就任し、文政12年には佐賀藩10代藩主鍋
島直正^{なおまさ}の姉とも婚儀を交わしたため、直正の義兄ともなった人物であった。佐賀藩内
における鍋島茂義の存在を考えると、長崎からもたらされた煙草は本藩へ伝えられた
可能性も否定できない。

4-1-2. 佐賀城下における煙草関係者について

次に、佐賀城下における煙草関係者について注目する。約260年間続いた江戸時代、
佐賀城下をはじめ佐賀藩内でも、一覽して煙草関係者を見ることは難しい。ただ、江
戸時代末期の嘉永7年(1854)に作成された「竈帳」(公益財団法人鍋島報効会蔵)に、
各業種の職人名等とともに佐賀城下で煙草関係の職業に従事していた者の名前を確認

⁵ 「手頭」試作品のようなものか。「長崎方控」中には他に「見本」の文字も見られ、「見
本」は完成している商品、「手頭」は試作品などではないかと考える。

⁶ 「呑氣」味の強さのことか。

することができる。

「竈帳」とは、佐賀城下の各町人地の住民台帳ともいべき資料である。各世帯の竈の数に基準が置かれ、全 11 冊に 45 町の記録が残り、竈主（戸主）の氏名、宗門、職業、身分、年齢のほか竈内の構成員およびその続柄も記載されている。この中から煙草の製造、販売などに関係する職業人（喫煙具など道具類を扱う職は除く）を抽出すると、全 45 町中 33 町で確認される【表 1】。なお各町の位置を理解するため、「竈帳」をもとに煙草関係者が所在する町名を書き込んだ城下絵図【図 1】も附図として掲げる。

【表 1】嘉永 7 年「竈帳」に見られる佐賀城下の煙草関係者

	町名	職名	人名	年齢
1	下今宿町	蓑商人	町人岩右衛門	58
2	紺屋町東側	煙草賣	(北原有右衛門殿与) 今泉壽助	42
3	〃	煙草賣	町人文吉 ※今泉壽助と同家	31
4	〃	蓑刻	町人慶藏	52
5	〃	蓑刻	町人嘉平 ※町人慶藏と同家	26
6	紺屋町西側	蓑刻	町人喜兵衛	29
7	〃	蓑刻	町人貞吉 ※穀物仲買/町人惣助子	27
8	〃	蓑刻	町人庄藏 ※塗師屋/眞崎清藏と同家	28
9	〃	蓑店	(井上丈左衛門殿被官) 永野勘吉	42
10	〃	蓑刻	町人左助	39
11	〃	蓑刻	町人恵七	50
12	〃	蓑刻	町人嘉七 ※町人恵七子	27
13	材木町東側	多葉粉店	町人半左衛門	25
14	〃	蓑賣	(戸田孫兵衛殿組与) 堤儀兵衛	27
15	材木町下西側	多葉粉店	(川瀬孫之允殿支配) 毛利平助	64
16	材木町西側	多葉粉店	(山代殿(白石鍋島直章)歩行) 宮崎利七	27
17	〃	栓突蓑店	町人勝藏	47
18	〃	蓑拵	町人卯作	30
19	〃	栓突蓑店	(中野忠太夫殿与) 久保丈助	48
20	〃	多葉粉店	松本兵左衛門 ※同地に出店	—
21	〃	蓑賣	仁戸田喜兵衛 ※組内勤/仁戸田又兵衛子	30
22	〃	煙草刻	町人定平	32
23	〃	多葉粉屋 与合頭	(大木主計殿被官) 吉岡利七	52
24	〃	蓑刻	(吉嶋左左衛門殿被官) 吉田貞助	44
25	牛嶋町北側	多葉粉切	清兵衛	55
26	〃	煙草葉取	なを ※清兵衛娘	17
27	上芦町	多葉粉刻	太平	42
28	〃	多葉粉刻	(鍋島隼人殿被官) 中溝壽七	25
29	高木町南側	多葉粉屋	町人亡勘助 後家 ※女性	47
30	〃	多葉粉刻	(諸岡伴之進殿被官) 小森卯兵衛	32

31	〃	煙草屋 与合頭	(鶴七右衛門殿被官) 前山儀助	45
32	高木町北側	千(栓) 突多葉粉	利兵衛	27
33	〃	多葉粉屋 年寄役 与合頭	(伊東三之允殿被官) 岸川長藏	58
34	〃	多葉粉屋	忠藏	40
35	〃	多葉粉刻	平兵衛	44
36	〃	多葉粉葉卷	(深江助右衛門殿被官) 高園喜三郎	36
37	〃	多葉粉刻 与合頭	爲次郎	38
38	〃	多葉粉刻	虎吉	31
39	〃	綿屋 多葉粉屋 咭役 与合頭	(本告治部右衛門殿与足輕) 内野清藏	61
40	上今宿町	畳表 苧 煙草 其他	(北原有右衛門殿) 田中耕作	36
41	〃	綿 煙草 古物座	町人利助	44
42	〃	炭塩綿店 煙草商売	(多久勘助殿組) 古賀平藏	46
43	柳町	烟草店(咭)	町人忠左衛門	62
44	〃	烟草商売	(川瀬孫之允殿支配) 野田十助 ※町人忠左衛門と同居	39
45	蓮池町	煙草 茶出売	(山代殿(白石鍋島直章)足輕) 吉岡文藏	48
46	〃	烟草刻	(播磨殿(太田鍋島茂快)家来) 大島甚右衛門	30
47	〃	栓突煙草 酒場	(馬渡七左衛門殿組) 堤奎兵衛	33
48	〃	煙草店	町人佐平	37
49	〃	煙草出賣	町人廣吉 ※髮結床・日雇稼/町人兵藏子	19
50	呉服町	煙草屋并刻方	(鍋島市佑殿被官) 前山庄兵衛	53
51	〃	刻方	前山卯三郎 ※前山庄兵衛子	20
52	〃	たばこ并荒物店 年寄役	(多久勘助殿与足輕) 渋谷兵藏	39
53	〃	煙草賣方	渋谷弥一 ※渋谷兵藏子	16
54	〃	打綿 煙草店	(宮田新五左衛門殿与足輕) 中元寺伝藏	58
55	寺町	煙草賣	中村良助 ※御武具方下役/中村又七子	48
56	唐人町	多葉粉屋	(川瀬孫之允殿支配) 井手平三郎	30
57	〃	多葉粉賣	町人宗助	23
58	〃	多葉粉葉取	町人しげ ※日雇稼/町人利兵衛娘	24
59	〃	多葉粉賣	町人嘉七 ※湯葉屋/八並嘉兵衛と同居	37
60	〃	多葉粉屋	(原五郎左衛門殿組) 不動寺兵衛	54
61	〃	多葉粉葉卷	石丸よね ※焼物売/石丸長藏娘	18
62	〃	たばこ葉卷	町人みゑ ※野菜物売/町人忠藏娘	17
63	〃	煙草 其外出賣	町人七兵衛	31
64	唐人新町	多葉粉賣	町人伊七	34
65	〃	煙草刻	町人佐助	40
66	中嶋町	草煙(煙草) 葉卷	町人清助 ※丸散店/西岡伝之助と同居	40
67	夕日町	煙草切	町人茂十	51
68	白山町	麻苧畳表 煙草店 質店	(下村八左衛門殿与) 田中徳右衛門	73
69	〃	煙草店 其他	(徳永伝之助殿与新御歩行) 香月新兵衛	56
70	〃	荒物店 多葉粉店	町人常藏	21
71	〃	多葉粉店 打綿店 咭役	(三上新五郎与) 平方忠兵衛	52
72	勢屯町	荒物 多葉粉店	(川瀬孫之亟殿支配) 服卷惠七	37
73	中町	煙草屋	町人忠太	73

74	多布施町	多葉粉賣	(川瀬孫之亟殿与) 横尾源五郎	48
75	伊勢屋町	煙草切	(山代殿(白石鍋島直章)足輕) 永渕惣三	36
76	八戸宿	茶 そぶり 煙草 花紙	(横山平兵衛殿与足輕) 小柳半兵衛	56
77	〃	多葉粉賣	沖田豊吉郎 ※針医/沖田仲碩子	26
78	〃	多葉粉刻方	沖田佐市 ※針医/沖田仲碩子	24
79	〃	煙草切 花作り	(枝吉忠左衛門殿与足輕井手惣助子) 文蔵	25
80	〃	煙草切	町人伸(伴カ)助 ※綿屋 咄役/村山久蔵と同家	39
81	〃	紅屋 多は粉や	(小川市左衛門殿与足輕) 副島儀七	48
82	〃	煙草切	副島仁左衛門 ※副島儀七弟	29
83	〃	煙草屋 与合頭	(石井源右衛門殿与足輕) 弥富喜平次	51
84	〃	煙草切	町人祐吉 ※町人平七弟/平七と同家	28
85	〃	茶 煙草 油 賣	(森川利左衛門殿与足輕) 江口助七	48
86	八丁馬場	刻莧 綿 商賣	(草場瑤助殿組足輕) 重松又兵衛	43
87	〃	刻莧商賣	(坂部又右衛門殿被官) 高原松助	50
88	伊勢屋本町上ノ丁	刻煙草商賣	(原次郎兵衛殿与足輕) 馬渡徳兵衛	62
89	〃	栓突煙草店商賣	森宗市	11
90	伊勢屋本町中ノ丁	莧車切職	町人弥兵衛	24
91	点合町西ノ丁	莧刻職	(牧弥学殿与足輕) 福井儀助	40
92	〃	莧刻職	町人栄三郎	25
93	〃	刻莧商賣	(張玄一殿組足輕) 増田権八	39
94	点屋町東ノ丁	莧刻職	町人武七	25
95	〃	莧刻職	(廣田長左衛門殿与足輕) 北村勘兵衛	49
96	六座町	煙草屋	(諸熊茂左衛門殿組小道具) 百武清助	41
97	〃	煙草葉取	(千葉八助殿組足輕) 川原勘助	49
98	〃	煙草切	町人伊助	28
99	〃	煙草屋	伊東吉蔵	18
100	〃	煙草屋	町人文次郎	16
101	〃	煙草切	今泉次兵衛 ※酒屋 横辺田代官所勤/今泉伴右衛門弟	21
102	長瀬町	多葉粉賣	町人喜三郎	59
103	道祖元町	煙草刻	町人市蔵	42
104	〃	煙草屋	(深堀庄左衛門殿与足輕) 増田丈左衛門	38
105	〃	煙草刻	(小川市左衛門殿与) 緒方為次郎	41
106	〃	煙草屋 其他	(川瀬孫ノ允殿支配) 石丸善助	44
107	本庄町	莧商賣	(古賀清兵衛殿与) 永渕千太郎 ※手明鑓/藤瀬兵次郎と同家	9
108	〃	栓突煙草 渡海船散使職	(入江又右衛門殿与) 西川儀兵衛	23
109	〃	莧 荒物 商賣	(川瀬孫之允殿支配) 永野徳平	45
110	〃	莧商賣 咄役	(牟田久左衛門殿与) 武富昨兵衛	50
111	〃	莧商賣 綿商売	武富佐一郎 ※武富昨兵衛子	22

出典：原資料「竈帳」嘉永7年(1854)(公益財団法人鍋島報效会蔵)より、三好不二雄・嘉子編『佐賀城下町竈帳』(九州大学出版会/1990年)を参考に作成。

【図 1】 



出典：『佐賀城下絵図に見る佐賀の町』財団法人鍋島報効会、平成 21 年所収の地図を参考に作成。原図は、「文化御城下絵図」文化年間（1810 年頃）（公益財団法人鍋島報効会蔵）。

これよると煙草商人、煙草(莨)売、煙草屋(多葉粉屋、多は粉や)、煙草商売、煙草(多葉粉)店などの販売に関する職業名があり、煙草(多葉粉、莨)刻や煙草切など製造に関わる職業も見るができる。また、製造に関する特殊な名称に「栓(千)突煙草(莨、多葉粉)」と「莨車切職」が見られる。この二つは佐賀の言葉で煙草の機械製造を表現しており⁷、莨車切については、歯車を利用した「ぜんまい刻み機」と同様のものではないかと考える。「竈帳」が作成された嘉永 7 年（1854）前後の佐賀城下では、従来からの「手刻み」と「栓突煙草」、「車切莨刻」の三つの方法で刻煙草は製造されていた。

表中の各人物についての詳細は明らかではないが、柳町で「烟草店」を営む町人忠左衛門および野田十助については、その後同地で煙草商を営んだ森永家の資料によると、寛政年間（1789～1801）頃に忠左衛門によって始められたとある⁸。藩の御用煙草として「幾作美御多葉粉」の銘柄で製造販売に務めたとあり、同時代のものと考えられる版木「幾作美御多葉粉」をはじめ、「肥前山忠（山は記号の「八」）豊後日ノ隈刻 佐嘉柳町 煙草屋忠左衛門仕入」と書かれた版木も残る（佐賀県立博物館寄託、森永雄平氏蔵）。同店で取り扱いの煙草の産地が何処のものであったかを記録する資料は残されていないが、藩内のもの以外に上記の版木から豊後国日隈（現大分県日田市）から仕入れがあったことがわかる。

⁷ 「竈帳内の佐嘉特有の言葉」三好不二雄・嘉子編『佐賀城下町竈帳』、九州大学出版会、1990 年、1014 頁。

⁸ 前掲「佐賀市のたばこ商 森永作平」『たばこ史研究』公益財団法人たばこ総合研究センター、No.122、2012 年、12 頁～29 頁に詳細。

また、八丁馬場^{はっちょうばば}で「刻菘商賣」を営む高原松助は、「坂部又右衛門殿被官」と書かれている。この坂部又右衛門は前述した第 28 代武雄領主鍋島茂義の異母弟で、佐賀城下の八丁馬場は武雄鍋島の佐賀下屋敷に近接する。高原松助の詳細について、坂部又右衛門の被官であったということ以外は不明であるが、高松が取り扱っていた煙草の中に武雄からもたらされたものがあった可能性も推測される。

4-2. 明治民営期の佐賀県内の煙草について

ここまで江戸時代末期の佐賀城下における煙草関係者について検討した。次に明治期の佐賀県内の煙草製造業従事者等について考察したいが、明治 37 年（1904）の煙草専売法が実施されるまでの佐賀市および佐賀県内の関係者の実数や氏名を確認するのは難しい。ただ、明治 24 年（1891）から 38 年 3 月末日までの『佐賀県統計書』「工業及製造」の項目中に「煙草製造」部門があり（31 年は部門無し）、市郡別に製造人員（職工などを含まず製造業者の人数と考える）または製造戸数の記録を見ることができる。

これによると、記録が始まる明治 24 年中の県内の煙草製造人は、刻煙草と紙巻煙草の区別なく 47 人で、郡市別内訳は【表 2】のとおりである。なお、郡市の位置の参考として明治 26 年の佐賀県地図【図 2】を挙げる。

その後、明治 32 年（1899）からは人員数ではなく製造戸数の表記となり、刻煙草・紙巻煙草別に記録がなされている。明治 38 年 3 月末日までの間に最多の戸数を記録したのは 32 年で、刻煙草製造は 109 戸、紙巻煙草製造は 1 戸であった（紙巻煙草の製造戸が刻煙草と重複しているかは不明）。なお、紙巻煙草の製造戸数については 33 年に佐賀市の 4 戸が最高で、翌年には 1 戸に減り、その後小城郡^{おぎ}、杵島郡^{きしま}、藤津郡^{ふじつ}で 1 戸が確認できる年もあるが、最終的に 38 年 3 月末には 0 戸となった。

製造関係者の最多戸数を記録した 32 年の郡市別内訳は【表 3-1】のとおりである。

上記二例は人員数と戸数の表記のため、単純にその数を比較することはできないが、佐賀市には大きな変化はないものの、それ以外の地域、特に県西部の西松浦郡^{にしまつうら}、杵島郡、藤津郡では明らかにその数が大きく増加していることがわかる。これらの地域は、当時県内で収穫される葉煙草の半数以上の生産地で、『佐賀県統計書』より明治 32 年の煙草作付反（作付面積）および収穫高をみると、【表 3-2】のとおりである。

西松浦郡、杵島郡、藤津郡については、葉煙草の生産地という土地柄もあり煙草製造業者も増加したのではないかと推測される。

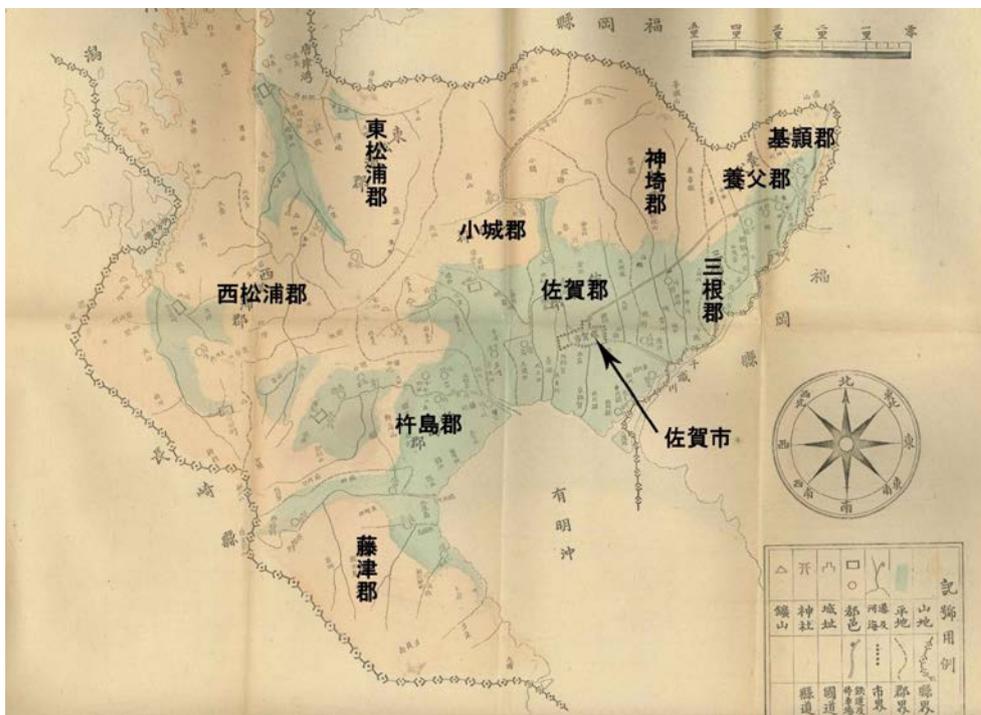
なお、煙草製造業者数がピークであった明治 32 年のこの年、『煙草雑誌第 101 号附録 全国煙草営業者人名簿』が発行（明治 32 年 6 月）されている。この名簿の中に佐賀県の煙草製造者および葉煙草専売業者の記載があり、【表 4】のとおり氏名を確認することができる。製造業者については先に挙げた『佐賀県統計書』の戸数とおおよそ一致している。

【表 2】

郡 市	製造人	郡 市	製造人	合 計
佐賀市	24 人	佐賀郡	5 人	
神埼郡	1 人	養父郡	1 人	
三根郡	1 人	小城郡	5 人	
東松浦郡	2 人	西松浦郡	3 人	
杵島郡	1 人	藤津郡	4 人	47 人

出典：『佐賀県統計書』佐賀県、明治 26 年、105 頁より。

【図 2】



出典：佐賀県教育会著『新撰佐賀県地理小誌全』明治 26 年（個人蔵）より。

【表 3-1】

郡 市	刻 煙 草	紙 卷 煙 草	郡 市	刻 煙 草	紙 卷 煙 草
佐賀市	26 戸	1 戸	佐賀郡	10 戸	—
神埼郡	3 戸	—	三養基郡	9 戸	—
小城郡	8 戸	—	東松浦郡	2 戸	—
西松浦郡	17 戸	—	杵島郡	16 戸	—
藤津郡	18 戸	—	合 計	109 戸	1 戸

※三根郡と養父郡は、明治 29 年に基肄郡と共に合併し「三養基郡」となった。

出典：『第 16 回佐賀県統計書』佐賀県、明治 34 年、甲 109～甲 110 頁より。

【表 3-2】

郡 市	作 付 反	収 穫 高	郡 市	作 付 反	収 穫 高
佐賀市	—	—	佐賀郡	4 畝(0.4 反)	85 斤
神埼郡	1 反	81 斤	三養基郡	1 反	168 斤
小城郡	18.0 反	31,750 斤	東松浦郡	4 反	2,225 斤
西松浦郡	14.5 反	15,300 斤	杵島郡	24.3 反	11,198 斤
藤津郡	98.9 反	51,363 斤	合 計	162.1 反	112,170 斤

※佐賀郡のみ作付欄は「畝」で記録されているため 0.4 反として合計数を出した。

出典：『第 16 回佐賀県統計書』佐賀県、明治 34 年、甲 70～甲 71 頁より。

【表 4】明治 32 年佐賀県煙草製造者・葉煙草専売業者

<製造業者>

1	佐賀市	材木町	池田 千六
2	〃	白山町	井手 藤次郎
3	〃	材木町	岡 喜一郎
4	〃	下今宿町	織田 安一郎
5	〃	呉服町	北島 卯作
6	〃	中町	久米 常吉
7	〃	紺屋町	古賀 庄三
8	〃	道祖元町	古賀 種吉郎
9	〃	伊勢屋本町	古瀬 宇八郎
10	〃	唐人町	小柳 忠八
11	〃	牛島町	千住 助七郎
12	〃	唐人町	千住 常一
13	〃	白山町	副島 市次
14	〃	下今宿町	竹下 兵次郎
15	〃	八戸町	田中 庄蔵
16	〃	水ヶ江町	田中 竹次郎
17	〃	蓮池町	辻 袈裟六
18	〃	柳町	辻 作次郎
19	〃	材木町	辻 祐七
20	〃	本庄町	永野 茂平
21	〃	白山町	原田 岩九郎
22	〃	岸川町	秀島 左平
23	〃	材木町	福田 覺時
24	〃	與賀町	松浦 祐平
25	〃	下今宿町	森 岩次郎
26	〃	柳町	森永 作平
27	〃	材木町	吉永 安平

1	佐賀郡	嘉瀬村	家永 小三郎
2	〃	東川副村大堂	久原 龍蔵
3	〃	中川副村早津江津本	關口 猶吉
4	〃	小關村小副川	田口 房吉
5	〃	久保田村	堤 彦一
6	〃	北川副村	中野 清吉
7	〃	川上東山田	西原 儀三郎
8	〃	東川副村	野田 今朝太郎
9	〃	東川副村	吉田 藤蔵
10	〃	進北村山領	吉村 喜久一
1	神埼郡	蓮池村小松	小野 佐平
2	〃	蓮池村小松	小柳 勇吉
3	〃	蓮池村小松	菅 雄三郎
1	三養基郡	三河村	石井 喜市
2	〃	三河村	石井 元七
3	〃	轟木村鳥栖	石川 政太郎
4	〃	三河村	大川 熊吉
5	〃	三河村市武	大川 文平
6	〃	北茂安村白壁	古賀 又造
7	〃	三河村寄人	坂井 小市
8	〃	北茂安村江口	境 主一
9	〃	三河村	高島 順吉
1	小城郡	牛津町牛津	記井 近太郎
2	〃	牛津町牛津	空閑 清八
3	〃	南多久村長尾	倉富 徳一
4	〃	西多久村板屋	古賀 治四郎
5	〃	牛津町牛津	末永 儀八
6	〃	小城町	野口 亮造

7	小城郡	小城町	古館 熊一
8	"	東多久村別府	松尾 谷吉
1	東松浦郡	濱崎村濱崎	川添 新兵衛
2	"	唐津町	古館 正治郎
1	杵島郡	朝日村甘久	市島 文八郎
2	"	龍王村坂田	井上 鹿太郎
3	"	橘村永島	小田 孫七
4	"	須古村堤又	川崎 源七
5	"	橘村	小林 常助
6	"	橘村大日	差形 愛吉
7	"	橘村	島本 清九郎
8	"	住吉村	上瀧 萬五郎
9	"	武雄村富岡	田栗 有三
10	"	北方村	田中 喜三
11	"	住吉村	中尾 官次郎
12	"	綿江村	原崎 初太郎
13	"	武内村三間坂	平山 松母
14	"	福治村	淵上 新太郎
15	"	橘村永島	古川 嘉左衛門
16	"	南有明村牛屋	森 芳太郎
1	西松浦郡	大山村	池田 藤市
2	"	牧島村松島	伊關 熊一
3	"	曲川村	浦川 作市
4	"	大坪村	香月 兵太郎
5	"	曲川村	金武 覺之助
6	"	有田村	岸川 金四郎
7	"	西山代村	久保 松次郎
8	"	大川村	久保 勇平

9	西松浦郡	西山代村楠久	中尾 源治
10	"	伊万里町	原 熊吉
11	"	大川村	松尾 保多
12	"	有田村	松尾 與一
13	"	有田村	三宅 良助
14	"	大坪村	山崎 貞吉
15	"	二里村中里	吉永 惣太郎
16	"	大坪村今岳	力武 伊十
1	藤津郡	八本木村	秋光 諫吉
2	"	多良村	川島 多蔵
3	"	能古見村三川内	小柳 武平
4	"	能古見村山浦	島本 卯左衛門
5	"	古枝村久保山	霜村 伊吉
6	"	吉田村	新郷 常五
7	"	八本木村	杉山 九平
8	"	南鹿島村高津東	橘村 梅太郎
9	"	塩田村	中島 友一
10	"	能古見村山浦	野中 亀太郎
11	"	能古見村	橋本 菊次郎
12	"	塩田村馬場下	八田 定平
13	"	能古見村山浦	松本 布一
14	"	南鹿島村	山浦 龍太夫
15	"	西嬉野村	山口 権作
16	"	八本木村	山田 貞治

<葉煙草売買業者>

1	佐賀市	下今宿町	古賀 鷹次郎
2	"	下今宿町	島 佐太郎
3	佐賀郡	東川副村大堂	野田 亀吉
4	藤津郡	南鹿島村	山浦 龍太夫

※氏名、五十音順。住所の番地は省略した。

出典：『煙草雑誌 第 101 号附録 全国煙草営業者人名簿』（中央煙草業協会 明治 32 年 6 月発行）より作成。

4-2-1. 佐賀市の煙草商

江戸時代末期の佐賀城下の煙草関係者を【表 1】で確認したが、その後明治時代に入り 37 年（1904）の煙草専売法が施行されるまで、民営期における佐賀市（ここでは明治 22 年発足した現在の城内地区を中心とした市域）の煙草製造者については、明治 32 年の記録【表 2】で確認することができた。

また、他に関係者を確認できる資料として、明治 21 年（1888）の「煙草営業者組合規約」（佐賀県立博物館寄託、森永雄平氏蔵）がある。この組合は佐賀郡（佐賀市発足は翌年）と小城郡の煙草製造人および仲買人からなり、規約の期間は同年 11 月からとあることから、この時期に組合が発足したものと考えられる。規約書最後に組合員の

記名があり、まとめると【表 5】となる。但し、当時全ての業者が組合に加盟していたかは不明であるため明治 32 年の【表 4】と比較はできないが、【表 4】に見られた人物については、「【表 4】に氏名有り」と記した。

【表 5】佐賀郡・小城郡の煙草製造人および煙草仲買人(明治 21 年 11 月)

<製造人>

1	佐賀郡材木町	池田 千六	【表 4】に氏名有り
2	佐賀郡白山町	井手 藤次郎	【表 4】に氏名有り
3	佐賀郡下今宿町	江頭 廣吉	
4	佐賀郡六座町	鬼崎 善七	
5	佐賀郡呉服町	北島 卯作 (組合東部取締人)	【表 4】に氏名有り
6	佐賀郡大堂村	久原 龍蔵	【表 4】に氏名有り
7	佐賀郡元町	古賀 佐吉	
8	佐賀郡東西村	古賀 新八	
9	佐賀郡久富村	古賀 鷹次郎 (組合西部取締)	
10	佐賀郡徳萬村	志津田 順蔵	
11	小城郡牛津町	末永 儀八 (組合西部取締人)	【表 4】に氏名有り
12	佐賀郡牛島町	千住 助七郎	【表 4】に氏名有り
13	佐賀郡水ヶ江町	副島 定助	
14	佐賀郡六座町	瀧川 佐七	
15	佐賀郡八戸町	田中 庄蔵	【表 4】に氏名有り
16	佐賀郡柳町	辻 作次郎 (組合東部長)	【表 4】に氏名有り
17	佐賀郡材木町	辻 藤兵衛	【表 4】に氏名は無いが、同じ材木町の辻祐七の関係者か
18	佐賀郡久富村	堤 彦一	【表 4】に氏名有り
19	小城郡小城町	土井 徳太郎	
20	佐賀郡相応津	徳久 幸三郎	
21	佐賀郡本庄町	永野 茂平 (組合西部長)	【表 4】に氏名有り
22	佐賀郡早津江津	中溝 熊吉	
23	佐賀郡大堂村	中村 義六	
24	佐賀郡大堂村	野田 文七 (組合東部取締人)	
25	佐賀郡白山町	原田 岩九郎	【表 4】に氏名有り
26	佐賀郡岸川町	秀島 左平 (組合西部取締人)	【表 4】に氏名有り
27	佐賀郡上芦町	藤井 忠七	
28	佐賀郡道祖元町	増田 伊三郎	
29	佐賀郡道祖元町	増田 丈左衛門	
30	佐賀郡與賀町	松浦 祐平	【表 4】に氏名有り
31	小城郡牛津町	松永 常七	
32	佐賀郡水ヶ江町	村岡 峯次郎	
33	佐賀郡柳町	森永 作平 (組長)	【表 4】に氏名有り
34	佐賀郡道祖元町	吉岡 長蔵	

<仲買人>※【表5】には仲買人の記載無し

1	佐賀郡下今宿町	高柳 伊與助	
2	佐賀郡下今宿町	竹下 文八	
3	佐賀郡柳町	辻 作次郎	
4	佐賀郡材木町	辻 藤兵衛	
5	佐賀郡下今宿町	森永 作平	
6	佐賀郡徳富村	吉田 源七	

※氏名、五十音順、太字は明治22年に佐賀市となったところ。

出典：「煙草営業者組合規則」（佐賀県立博物館寄託、森永雄平氏蔵）より作成。

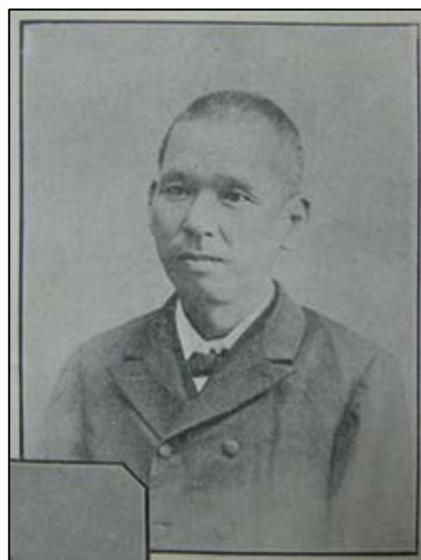
4-2-2. 佐賀市の煙草商・森永作平

森永作平（安政元年/1854～昭和9年/1934）は、前述の如く佐賀城下柳町で「煙草店」を営んだ町人忠左衛門および野田十助【表1】のあと同地で煙草商を営んだ人物である。前掲明治21年（1888）の「煙草営業者組合規約」では組合の組長とあり（【表5】）、また明治34年に発足した「長崎県佐賀県煙草製造業者組合」では組合副長（佐賀県支部長）を務めた。さらに『煙草雑誌 第77号』（明治30年9月）の巻頭には、全国の主要煙草業者5名のうちの1人として森永の肖像写真【資料1】も掲載されるなど、煙草業界ではまさに佐賀の代表格であった。

森永は柳町の店の他に、同市下今宿町しもいましゆく（【図1】の下今宿町と同地）に支店を構えた【資料2】。両店とも有明海に通じる佐賀江川（上流は裏十間川）沿いにあり、鹿児島、熊本、長崎などから葉煙草を船で運び荷揚げをした。支店における売上高について明治25年（1892）6月16日付佐賀新聞第20面に記事が見られ、前年7月からの1年間の売上高は約3,500俵あり、それらは豊後と鹿児島から仕入れたものとされる。

森永が製造した煙草の銘柄には、看板商品であった刻煙草「富士乃煙」のほか、同じく刻煙草「霧降」「紅梅」などがあり、紙巻煙草については「軍備印」「国光印」「国花印」など確認できるもので計11種類あった。

現在、森永家資料の多くが佐賀県立博物館に寄託（森永雄平氏蔵）されている。明治24年2月20日付東京麹町の煙草問屋今泉勝平（馬屋商店）からの仕切書「売渡状」には、刻煙草「ゴールデン」「リッチモンド」紙巻煙草「オ、ルトコールト（オールドゴールド）」



【資料1】森永作平肖像写真

出典：『煙草雑誌 第77号』中央煙草業協会、明治30年より（たばこと塩の博物館蔵）

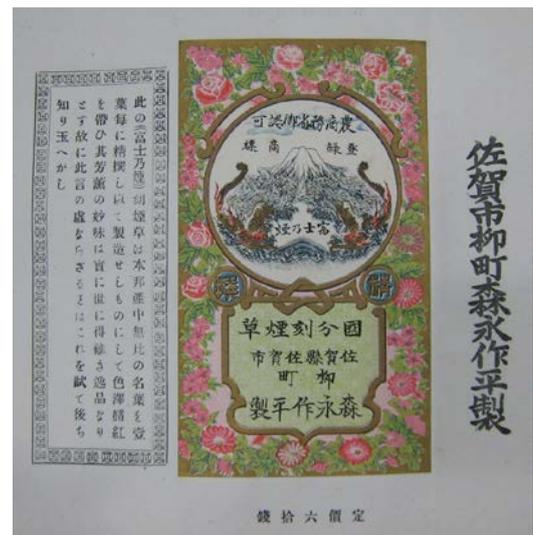
など刻煙草 5 種、紙巻煙草 1 種の銘柄が見られ、東京から外国煙草の取り寄せがあったことがわかる。また、「明治二十年頃以降烟草ニ関スル調査報告書」の中には明治 32 年 1 月から 12 月までの葉煙草受払報告表の控えがあり、葉煙草の種類に「出水」「熊本」「志波」「備後」「支那」の名前が見られた。更に、主力商品であった刻煙草「富士乃煙」については、残されたパッケージより国分葉の使用が分かる【資料 3】。

佐賀の煙草業界を代表する森永作平の店では、佐賀以外の各地から葉煙草を取り寄せ、製造販売を行っていた。



【資料 2】森永作平の店舗の様子

出典：『佐賀縣獨案内』龍泉堂、明治 23 年（武雄市蔵）より



【資料 3】パッケージ

出典：「国分刻煙草 富士乃煙」（個人蔵）

なお、その後の森永作平については、煙草の専売化によって代々続いた煙草製造販売の業を廃止し、柳町の煙草製造販売所があった場所で明治 40 年に森永呉服店を開業、また、同店と川を挟んだ対岸の場所に蒸気機関を導入して造っていた刻煙草工場を精米・精麦業を開業した⁹。

4-3. 銀座における佐賀出身の煙草関係者について

ここまで佐賀における煙草関係者について検討した。一方、佐賀出身者で佐賀との関係を保ちながら現在の銀座で煙草事業を営んでいた人物に西村辨吉、江副廉蔵、枝吉熊彦がいる。彼らはそれぞれ菊水商店、肥前屋および江副商店という店舗を出店していた。この 3 者について当時中央煙草業会が発行していた『煙草雑誌』を基本に調査を行った。

⁹ 注 8 と同様。

4-3-1. 西村辨吉と菊水商店

西村辨吉の詳細については、『煙草雑誌 第2号』（明治24年7月）「西村辨吉氏の忍耐」（41～42頁）の冒頭で「氏は佐賀の人なり」とある。また、西村が営んだ菊水商店については、明治23年に大阪龍泉堂から発行された明治銅版画『佐賀縣獨案内』で、佐賀市柳町思案橋角に西村為助が営む鳶屋本舗の出張店（東京京橋区尾張町二丁目貳番地）として紹介されている。佐賀の鳶屋は売葉のほか紙類、文具類、絵具類が取り扱われているが煙草類の表記は無く、一方、菊水商店は煙草問屋として営業され、銅版画には「佐賀煙草 一手売捌所」と表記される【資料4】。



【資料4】西村辨吉の菊水商店の様子
出典：『佐賀縣獨案内』龍泉堂、明治23年
（武雄市蔵）より。

西村の東京店の経歴を、佐賀新聞の掲載広告および『煙草雑誌』の記事¹⁰よりまとめると以下のとおりである。

西村は明治16年（1883）頃までは学業を志して「大都遊学」の書生であったが、商業に従事する事を思い立ち、明治17年に銀座で初めて店を構えた¹¹。店名は「菊水商店」ではなく「佐賀屋」。住所は京橋区瀧山町8番地（現・中央区銀座6丁目辺り）で、佐賀の煙草を佐賀と同価格で販売した。明治22年（1889）に京橋区尾張町2丁目2番地（現・中央区銀座6丁目9-3辺り）に店舗を移し、この時から「菊水商店」を名乗るようになったと思われる。その後、店舗の狭さから明治25年（1892）に京橋区尾張町2丁目6番地（現・中央区銀座6丁目9-6 銀座菊水がある場所）へ移転し、それまでより規模を拡大して営業を行った。

また、『煙草雑誌 第33号』（明治27年1月）の広告には、支店として「菊水支店／神奈川県横須賀町元」、関西代理店として「櫻商店／兵庫県神戸魚ノ棚町」が紹介されている。

『煙草雑誌』での各広告を見ると、菊水商店は「煙草問屋」あるいは「煙草売捌問屋」と書かれ、佐賀煙草、薩摩煙草、外国煙草などが取り扱われた。佐賀煙草につい

¹⁰ 佐賀新聞（明治17年8月24日付4面）掲載広告。「西村辨吉氏の忍耐」『煙草雑誌 第2号』明治24年7月、41～42頁。「菊水商店の移転」『煙草雑誌 第15号』明治25年8月、18頁。

¹¹ 『佐賀新聞』明治17年8月24日、第4面の掲載広告には「今般開店仕」とある。

ては、辻藤兵衛、辻作次郎、辻袈裟六、池田千六（いずれも【表 4】【表 5】に見られる）製の取り扱いが多い。薩摩煙草については、第 32 号（明治 26 年 12 月）に濱崎淺吉（指宿郡今和泉村）と「今般一手特約販売仕候」とあり、以降同人製造の煙草の取り扱いが確認できる。

外国煙草については、第 13 号（明治 25 年 6 月）にマニラ紙巻煙草の「特約大販売」店として肥前屋の江副廉蔵、馬屋の今泉勝平、松葉屋の千葉松兵衛とともに名前を連ね、以降、外国煙草の取り扱い表記も続く。カナダ煙草の取り扱いも盛況で、第 27 号（明治 26 年 7 月）と第 31 号（明治 26 年 11 月）の広告には、「北米、デー、リチイ会社日本専売店」「北米、デー、リチー会社製造煙草直輸入専売問屋」と書かれている。

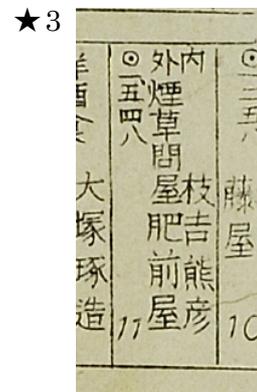
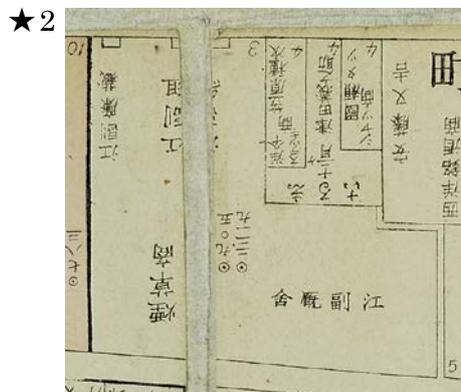
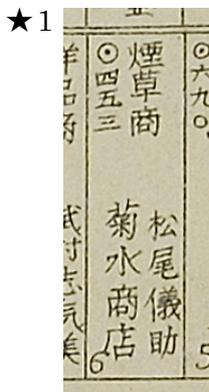
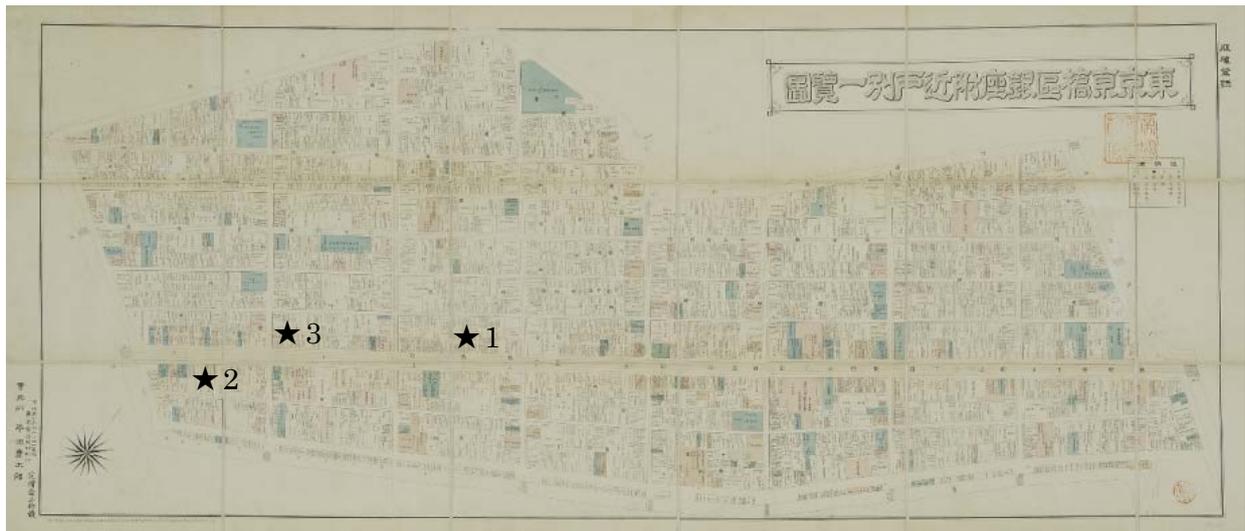
現在、菊水商店があった場所には煙草喫煙具専門店「銀座菊水」がある。同社から私家版として出版された『白い花』（2 代目社長内藤長一氏の回顧録記録、3 代目社長内藤幸太郎氏発行）および内藤幸太郎氏の回顧¹²によると、煙草が専売制になる前年の明治 36 年（1903）に、銀座菊水の創業者内藤志ん氏（内藤長一氏の母で幸太郎氏の祖母）が店舗を買い取り、店名と商標を引き継いだとある。記述の中に西村辨吉の名前はないが、『白い花』には「私の店は元佐賀たばこの一手販売をやっていたのを、母が買い受けて...」とある。

さて、内藤志ん氏は誰から店舗を購入したのか、西村以外の人物を推測させる資料がある。明治 35 年（1902）平田勇太郎作の「東京京橋区銀座附近戸別一覽図」（国立国会図書館蔵）を見ると、尾張町の菊水商店には「松尾儀助」という名前が書かれている【資料 5】。松尾も西村と同じ佐賀出身で、明治時代前半、日本の美術品や物産品を輸出した半官半民の貿易会社「起立工商会社」の社長を務めた人物である。仮に明治 35 年の段階で菊水商店の経営者は西村ではなく松尾であったとすると、内藤氏が店舗を購入した相手は松尾儀助ということだろうか。

その後明治 40 年に発行された『佐賀縣商工名鑑』のなかに、佐賀市柳町の文具商として西村辨吉の名前を見ることができる。いずれかの時点で西村は東京を引き上げ佐賀に戻ったのだろう。現段階では松尾儀助の菊水商店に関する資料や、西村と松尾の関係なども不詳のため、今後の課題としたい。

¹² インターネット記事「祝江戸開府 400 年特別取材 中央区を語る～銀座編～内藤幸太郎」2003 年 8 月、「東京中央区ネット」より。
<http://www.tokyochuo.net/issue/talk/200308/toku01.html>

【資料 5】「東京京橋区銀座附近戸別一覽図」に見られる店舗と代表者



出典：平田勇太郎「東京京橋区銀座附近戸別一覽図」明治 35 年、国立国会図書館蔵（『広告の親玉 赤天狗参上！～明治のたばこ王 岩松松平～』たばこと塩の博物館、2006 年より転載）。

4-3-2. 江副廉蔵と肥前屋および江副商店

江副廉蔵（嘉永元年/1848 年～大正 9 年/1920 年）【資料 6】は現在の佐賀市鬼丸町^{おにまる}出身。慶応元年（1865 年）長崎に佐賀藩が設立した英学塾致遠館で学んだ。明治の初めより海外へ渡り、明治 11 年（1878 年）にはニューヨークで商会を開き、日本産雑貨の販売を行った。その後、明治 18 年 4 月、京橋区竹川町 11 番地（現・中央区銀座 7 丁目 8-9 宗家源吉兆庵辺り）に「肥前屋」を開業し、アメリカ製煙草の取り扱いを始めた。今回調査した『煙草雑誌』中、第 8 号（明治 25 年 1 月）以降に江副の広告を見ることができ、「肥前屋舶来烟草直輸入卸問屋」と表記されている。肥前屋は、先に述べた菊水商店の西村辨吉と同様、マニラ紙巻煙草の「特約大販売」店の一つであった。

『煙草雑誌』に見られる江副の広告には取り扱い煙草のパッケージの絵が掲載され、主に紙巻煙草「ピンヘッド」「カメオ」「デューク」、刻煙草「ジプシー」などが見られ

る。第 15 号（明治 25 年 8 月）と第 16 号（明治 25 年 9 月）の広告には、「ピンヘッド今回ヨリ石版摺寫真挿入」とあり、この頃より煙草カードの存在が窺える¹³。他にも、煙草カードについて同誌第 34 号（明治 27 年 2 月）の記事に、新着のピンヘッドに挿入の日本美人の画はかつて江副が考案し、それらの写真 200 枚をアメリカの製造会社へ送り封入させたと書かれている¹⁴。

また、第 22 号（明治 26 年 2 月）の広告および記事¹⁵では、紙巻煙草「リトルジョーカー」を 10 斤購入するごとに、アメリカ製の美しい折椅子 1 脚がおまけに添えられるとある。要望が有れば、椅子の代わりに目覚まし時計が添えられた。

肥前屋の取り扱いが外国製煙草が中心だが、江副の地元佐賀製の煙草も取り扱っており、『佐賀縣獨案内』（明治 23 年）に掲載されている佐賀市材木町の辻藤兵衛の頁には、売捌所として、前述の菊水商店とともに「京橋区竹川町 肥前屋商店」の名が記されている。

明治 26 年（1893 年）11 月 3 日、江副は中央区出雲町 3 番地（現・中央区銀座 8 丁目 9-16 長崎センタービル辺り）に移転し、「江副商店」を開業した。【資料 5】の★2 は移転後の場所である。

同月 19 日に発行された『煙草雑誌 第 31 号』には開店式の様子が紹介され、建物は同年 2 月に起工し頃日落成したと書かれている。この新築祝いの様子は江副の地元佐賀でも新聞報道¹⁶され、建物は「二階作り」とあり、また、2 階建ての江副商店の外観写真が『煙草雑誌 第 112 号』（明治 31 年 5 月）に掲載されている【資料 7】。

4-3-3. 枝吉熊彦と肥前屋

江副廉蔵が江副商店に移転後も、肥前屋は同地に存在する。しかし、店の経営者あるいは店主として江副の名は見られない。また、江副が移転する前は、『煙草雑誌』には毎号肥前屋の広告が掲載されていたが、明治 26 年 11 月以降、肥前屋の広告の掲載は少なくなり、確認できた各誌には店名のみで人物の表記は無い。



【資料 6】江副廉蔵肖像写真
出典：『在京佐賀の代表的人物』
喜文堂、大正 7 年より。

¹³ 第 14 号（明治 26 年 7 月発行分）は所在不明のため未確認。第 13 号（6 月）での記載は無い。

¹⁴ 「美人の寫真十八萬弗」『煙草雑誌 第 34 号』明治 27 年(1894)2 月、13～14 頁。

¹⁵ 「リトルジョウカー」『煙草雑誌 第 22 号』明治 26 年(1893)2 月、24 頁。

¹⁶ 「江副商店の新築祝ひ」『佐賀自由』（※『佐賀新聞』は明治 25 年 12 月から明治 32 年 3 月まで『佐賀自由』と名称変更している）明治 26 年(1893)11 月 10 日、第 2 面。



【資料 7】江副商店外観写真

出典：『煙草雑誌 第 112 号』中央煙草業協会、
明治 31 年より（天理大学附属天理参考
館蔵）。



【資料 8】枝吉熊彦肖像写真

出典：『在京佐賀の代表的人物』
喜文堂、大正 7 年より。

ところで、『煙草雑誌』の広告の中で、第 67 号（明治 29 年 11 月）に「京橋区竹川町 枝吉熊彦」と書かれたものがある。第 69 号附録（明治 30 年 1 月）「中央煙草業協会々員氏名録」にも、「京橋区竹川町 枝吉熊彦」の名が見える。

さらに『日本商工営業録』（明治 31 年）を見ると、「竹川町十一 肥前屋 枝吉熊彦 物品販売業、煙草卸小売」とある。一方、江副については、「出雲町三 肥前屋江副商店 江副廉蔵 物品販売実業、煙草卸小売」と書かれている。同書 2・3 版でも同様の記載がある。また、【資料 5】の地図には、竹川町 11 に「枝吉熊彦 内外煙草問屋肥前屋」、斜め向かいの出雲町 3 に「江副廉蔵 煙草商 江副組」が書かれている¹⁷。その他『中央区沿革図集〔京橋篇〕』所収「大正元年 京橋区地籍地図」¹⁸では、竹川町「十一ノ一 枝吉熊彦」、出雲町「三ノ二 江副商店」が見られ、以上の事から、江副廉蔵が江副商店に移転した後、肥前屋は枝吉熊彦が代表になっていたと考えられる¹⁹。

¹⁷ 『広告の親玉 赤天狗参上！～明治のたばこ王 岩松松平～』たばこと塩の博物館、2006 年、69 頁では、江副商店は南金六町と書かれているが、正しくは出雲町である。

¹⁸ 原資料「東京市拾五区及接続郡部四郡地籍地図並びに地籍台帳」（中央区立京橋図書館蔵）京橋区部分。

¹⁹ 末岡暁美著『大隈重信と江副廉蔵—忘れられた明治たばこ輸入王』洋学堂書店、2008 年、105 頁によると、江副の移転について「1893（明治 26）年には竹川町の肥前屋の経営を田口貞道に任せ、通りを隔てた出雲町三番地（現在銀座八丁目）へ進出し、江副商店を開いたようです。」とある。しかし、今回の研究過程では田口貞道の名前および肥前屋との関係は見られず、『煙草雑誌』や人名録、地図等の資料から江副移転後は枝吉熊彦

枝吉と江副との関係および枝吉の詳細については判然としないが、『在京佐賀の代表的人物』（大正7年）の中に枝吉熊彦の肖像写真【資料8】が掲載されており、人物の解説は無いものの枝吉が佐賀出身であることが確認できる。枝吉と江副が同郷であることも考え合わせると、江副から枝吉への譲渡が推測されるが、これらの事情については今後の研究課題として残しておきたい。

さて、枝吉熊彦時代の肥前屋の取り扱い煙草については、『煙草雑誌』の広告によると「内外巻刻煙草」として国内製・外国製の巻煙草、刻煙草のあらゆる煙草が取り扱われているとある。その中には佐賀市柳町の森永作平製煙草もあり、森永の広告²⁰に「関東一手販売 肥前屋」と書かれている。他にも、同誌第67号には大阪皆野商会製造の「象印口紙付煙草東京販売店」と書かれた広告も掲載されている。なおこの象印煙草については、『民営時代たばこの意匠』社団法人専売事業協会、昭和49年に掲載された「民営時代たばこ製造元、製品名」リスト中に「(東京市京橋区) 枝吉熊彦 口付 象印口紙付 50本」(525頁)を見ることができる。

4-4. 今後の課題

従来、佐賀における煙草関係者およびその取り扱い煙草については、明治期の状況も含め詳細は不明であった。

しかし、今回の研究で、江戸時代後期の煙草に関する資料と佐賀城下での関係者の存在を確認し、さらに、明治時代、銀座における佐賀出身者たちの活躍の実態を確認できたことは大きな収穫であったと言える。

だが、その一方で、江戸時代後期の「竈帳」から抽出した佐賀城下の人物【表1】と明治期の佐賀市の煙草関係者【表4】たちが、どのような関連を有したかについては、森永作平以外には、その成果は乏しいと言わざるを得ない。

今回確認できた人物相互の関係、流通の状況などを考察し、また煙草専売法が実施された明治37年前後の状況を調査することを今後の課題として提起し、擱筆とする。

が肥前屋の代表的人物であったと考える。

²⁰ 『煙草雑誌』第78、81～83、85号（第84号は所在不明のため未確認）掲載広告。

5. 主要参考文献

- 多久市史編さん委員会編『多久市史 第二巻』多久市、平成 14 年(2002)。
- 北九州たばこ耕作連合協議会編『煙草史 福岡・佐賀・長崎』煙草史 福岡・佐賀・長崎 刊行会、昭和 51 年(1976)。
- 松江信彦「佐賀藩武雄領における「たばこ」統制の始まり」『たばこ雑誌』No.63、たばこ史研究会、平成 10 年(1998)、2 頁～3 頁。
- 奥田雅瑞「松江信彦氏寄稿『佐賀藩武雄領における「たばこ」統制の始まり』について＝補中と補説および初期たばこ専売資料＝」『たばこ雑誌』No.63、たばこ史研究会、平成 10 年(1998)、4 頁～11 頁。
- 三好不二雄・嘉子編『佐賀城下町竈帳』九州大学出版会、1990 年。
- 中谷与助編『佐賀県独案内 一名商工便覧』青潮社、1983 年。
- 山脇悌二郎著『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、昭和 39 年(1964)。
- 山脇悌二郎著『海外交渉史』法政大学通信教育部。
- 千住生「肥前名物題註」『肥前史談 六月号』肥前史談會、第 13 巻第 5 号、昭和 14 年(1939)。
- 千住生「肥前名物題註」『肥前史談 七月号』肥前史談會、第 13 巻第 6 号、昭和 14 年(1939)。
- 『御城下絵図に見る佐賀のまち』財団法人鍋島報効会、平成 21 年(2009)。
- 『御城下絵図を読み解く』財団法人鍋島報効会、平成 22 年(2010)。
- 『佐賀県統計書 (明治 24 年～38 年)』佐賀県、明治 26 年～40 年(1893～1907)。
- 佐賀市編『佐賀市史 下巻』佐賀市、1952 年。
- 『第 3 回佐賀城下探訪会 町人町のにぎわい 城下東部・蔵造りの家を訪ねて』財団法人鍋島報効会、平成 24 年(2012)。
- 『たばこと塩の博物館 常設展示ガイドブック』たばこと塩の博物館、2007 年(改訂)。
- 旧肥前史談會『佐賀県歴史人名事典』洋学堂書店、平成 5 年(1993)。
- 『日本全國商工人名録全』日本商工人名録発行所、明治 25 年(1892)。
- 『日本商工営業録』日本商工営業録発行所、明治 31 年(1898)(1 版)。
- 『日本商工営業録』日本商工営業録発行所、明治 33 年(1900)(訂正 2 版)。
- 『日本商工営業録』日本商工営業録発行所、明治 35 年(1902)(訂正 3 版)。
- 笠原廣編『在京佐賀の代表的人物』喜文堂、大正 7 年(1918)。
- 末岡暁美著『大隈重信と江副廉蔵－忘れられた明治たばこ輸入王』洋学堂書店、2008 年。
- 中谷哲二「明治期、中央煙草業協会の機関誌<煙草雑誌>について－島根大学附属図書館及び天理参考館所蔵本を中心に－(その 2)」『天理参考館報』第 24 号、(学)天理大学出版部、2011 年、53 頁～72 頁。
- 中谷哲二「明治期、中央煙草業協会の機関誌<煙草雑誌>について－島根大学附属図

書館及び天理参考館所蔵本を中心に－（その3）』『天理参考館報』第25号、(学)
天理大学出版部、2012年、41頁～56頁。

内藤長一著『白い花』内藤幸太郎・銀座菊水、昭和46年(1971)。

『佐賀縣商工名鑑 附成功者列傳』すいらい新聞社、明治40年(1907)。

『中央区沿革図集〔京橋篇〕』東京都中央区立京橋図書館、平成8年(1996)。

『民営時代たばこの意匠』社団法人専売事業協会、昭和49年(1971)。

『明治民営期のたばこデザイン』たばこと塩の博物館、平成16年(2004)。

『広告の親玉 赤天狗参上！～明治のたばこ王 岩松松平～』たばこと塩の博物館、2006年。

『蘭学の来た道 武雄領主の買い物帳』武雄市図書館・歴史資料館、2004年。

『九州の蘭学 武雄の蘭学』武雄市歴史資料館、2014年。

『佐賀県の地名 日本歴史大系 42 佐賀』平凡社、1980年。

佐賀新聞社佐賀県大百科編集委員会編『佐賀県大百科事典』佐賀新聞社、1983年。

『佐賀新聞』データベース

6. 英文アブストラクト

Development of Tobacco Industry of Saga in Modern Time

Takako KONDO ²¹

Yoshiatsu KAWASOE ²²

This research is about tobacco industry focusing on circumstance of tobacco in Saga domain and Saga prefecture from later Edo era to recent era (before the *Tobacco Monopoly Law*).

As method of research, we researched the materials which remain in museums, historical archives, and libraries which is mainly located in Saga prefecture. In addition, with regard to Meiji era, we selected some participants of tobacco and tobacco which hadn't become under the government monopoly by mainly using "*Enso Zasshi*", the magazine which has been published from *Chuo Tabakogyo Kyokai* and which was first published in June of 1891(Meiji 24), comparing with statistic material about tobacco of Saga prefecture.

The material of *Takeo Nabeshima* family, which was a feudal lord of Takeo of Saga domain, called "*Nagasakikata Hikae*"(Belongs to Takeo city) has record of detailed ordering manner or preferred flavor of tobacco which would indicate the preference of the liege lord. Besides, we confirmed people who participated in manufacture and sale of tobacco in 33 towns from "*Kamado cho*"(belongs to foundation of *Nabeshima Hokokai*), which is a resident register of Saga castle town.

From the materials of Meiji era till the time *Tobacco Monopoly Law* was effective, we confirmed the participants, number of manufactures and sale places, and production of tobacco in Saga city and Saga prefecture area. From the data, we could confirm Sakuhei Morinaga who was a representative man of tobacco and served as a chairman of the tobacco business association of Nagasaki and Saga prefecture, and 3 persons, who succeed where is Ginza Tokyo now, Benkichi Nishimura, Renzo Ezoe, and Kumahiko Edayoshi from Saga prefecture. It also turned out that there were tobaccos which were sold in Ginza and included what were manufactured in Saga.

²¹ Takeo City Library/History Archive, Nagasakikata Hikae Research Society

²² Takeo City Library/History Archive